産業医・社会保険労務士

ヒライ先生のQ&A



平井 直実

岐阜市生まれ。つくば市在住。
岐阜高校卒業。藤田保健衛生大学（現 藤田医科大学）医学部卒業
【ヒライ労働】みのあ産業医社労士事務所 所長

小児科診療に携わるとともに、全国でも数少ない産業医および社会保険労務士の両資格を持ち、医療と労働の両面から働く環境の在り方を探究している。働く世代の安定が、次の世代の健やかな成長につながると考えている。母乳育児の普及と、その支援の実践をライフワークとしている。

今月のQ&A

産業医って、何をする医師なの？

Q 「産業医」は、普段病院で診察をする医師とは何が違うのでしょうか。会社では、どのようなことをするのですか。

私たちは、日々の暮らしの多くの時間を、仕事をして過ごしています。社会にはいろいろな働き方がありますが、「雇われて働く」ときには、一つの特徴が伴います。

働く場所や時間、仕事量、使う設備、周囲の人との関係など、様々な働く条件について、労働者自身の裁量は小さいという点です。そして、こうした条件は心身にも影響します。

自分自身で健康を守ることは大切です。しかし、仕事中の健康管理を本人だけに任せるべきではありません。職場として、働く人の健康を守る。そこに、産業医学が大切な役割を果たす場があります。

A-1 医学・身体の視点

“産業医学の母”と呼ばれるアメリカの医師、アリス・ハミルトン（1869-1970）をご存知でしょうか。彼女は、20世紀初頭、ヨーロッパに比べて産業医学の発展が遅れたアメリカで、職業病としての鉛中毒の調査を担当することになると、自ら工場へ足を運びました。作業工程を見て、病院などの記録を調べ、労働者から話を聞く。そうして危険な工程と病気との関係を明らかにし、その成果を職場の改善や労働者を守る制度へつなげました。

私がとても心を動かされた、アリスの言葉があります。

「女性が、生産される製品の価値よりも、それを生産する労働者にまず心を配ることは、当時、自然で正しいことと受け止められていたようだ。」だから事業者も医師も話を聞いてくれたようだと、アリスは振り返っています。

子どもや家族の表情や家の外での暮らしぶりが気にかかるように、職場でも、働く人の疲れや言葉にならない無理が気になります。病気を治すだけではなく、「なぜ病気になったのか」「職場に原因はないか」と考え、その原因を減らそうとしたアリスの行動は、医学の役割であるとともに、私にとって、ごく自然に感じられる思いです。

生きる中で自然に抱いてきた感覚が、医師としてなすべきことにつながっている。産業医学には、働く人をみる優しい眼差しが、その原点からあることに感銘を受けたのです。

A-2 法的・労務の視点

現行法では、常時50人以上の労働者を使用する事業場には、原則として産業医の選任が義務づけられています。50人未満の事業場には原則として選任義務はありませんが、問題は会社の規模にかかわらず起こります。そのため、小規模事業場を支援する地域産業保健センターなどの公的な仕組みも用意されています。

A-3 組織づくりの視点

働く人が体調を崩したとき、「働くか、休むか」だけでなく、労働の条件や環境などを調整することで、体調の回復を図りながら働き続ける選択もあります。産業医はそのような選択のためのアドバイスを行います。また、不調の人をみるだけではなく、職場を歩き、作業や環境を見て、従業員が不調を来す原因がないかを考えることも大切な役割です。

産業医は「会社のお医者さん」ではありません。健康診断や面談、職場巡視などを通して、働く人の健康と仕事との関係を医学的に考え、事業者に意見を伝えます。

まず、従業員が職場に健康上の問題を相談したときに産業医につないだり、従業員が直接産業医へ相談したりできる態勢を整えましょう。

さいごに

アリス・ハミルトンが工場に入り、製品よりそこで働く「人」を見つめてから、100年以上が経ちました。働き方や環境は大きく変わりましたが、その眼差しは今も変わらず受け継がれています。働く人と、仕事や職場。その両方を見ながら、健康を守り、できるだけ安心して働き続けられる道を考える。産業医は、そのために「人」と「仕事」、そして「職場」をみる医師です。